

Edkinsの記した19世紀の北京音

中村雅之

1. エドキンズ (Joseph Edkins) の記述態度

明末以降、多くの西欧人が中国語を記述したが、そこに一貫しているのは南京官話重視、あるいは北京語軽視の態度であった。このことは宣教師たちが、中国全土において南京官話がよく通じると認識していたことと、彼らの布教活動の拠点が主に南方にあったことを勘案すれば、ある意味で当然と言えるのであるが、そのことは必ずしも北京音が影響力を持たなかったことを意味しない。北京と南京の言語は互いに影響を与え合い、近代の幕が開くと、ついには北京語が標準語としての地位を獲得してゆくことになる。

高田(2001)で論じられたように、アヘン戦争以後に外交言語としての地位を得たことが「北京語の勝利」を決定づけたのであるが、その当時の中国にあって、1850年代～1860年代の北京語の状況を細かに記述したのが、ウェイド(Thomas Wade)とエドキンズの2人である。ウェイドの記述が北京語一辺倒なのに比べ、エドキンズは南京官話と北京語との双方を比較しつつバランスを取ろうとしている。この違いはウェイドが外交官の立場から言語を見ているのに対して、エドキンズが宣教師の伝統の上に立った研究をしているという点に由来するのであろう。

この時期の二人の主な著作は、Edkins(1857)、Wade(1859)、Edkins(1862)、Edkins(1864)、Wade(1867)という順になる。エドキンズがEdkins(1862)以降、北京語の記述に際して、しばしばWade(1859)を参考にしたことは確かであるが、個々の表記方法はやや異なる。とりわけEdkins(1862)における旧入声字の北京音表記は、彼の記述態度を如実に物語っている。

Edkins(1862)はlesson1からlesson52までの段階的なテキストと分野別の語彙、そして北京語等の声調体系の説明から成るが、前半では標準官話の正書法(the standard Mandarin orthography)による表記が用いられ、lesson49以降では北京音(the Peking sounds)による表記が採用されている。しかし、その北京音の表記においても旧入声字の表記には官話の表記と同様、音節末に「-h」の表記を残している(「白.paih」「熟.sheuh」など)。南京官話で短い声調であることを示す(声門閉鎖を示すと言ってもよい)記号である「-h」を北京音の表記にまで用いるのはあくまでも便宜上のものであり、北京音の情報としては余分であるが、敢えてそれを行ったところにエドキンズの姿勢を見ることが出来る。声母・韻母・声調の各面において互いにかなりの差異を見せていた19世紀半ばの北京語と南京官話を、彼は同じシステムの正書法によって表記しようと努めたのである。

2. 「学」の表記

エドキンズのローマ字表記は、調類を示す記号を四隅(右下を除く)に付加する点に特徴がある。「上平(=陰平)」は左下に「,」、「下平(=陽平)」は左下に「.」、「上声」は左上に「,」、「去声」は右上に「'」を付し、「入声」は綴りに「-h」が付くので記号は付加しない。ここでは煩を避けて、それらを数字で1から順に示すことにする。「,pai」→「pai1」、「.wei」→「wei2」など。

Edkins(1857)は、各地の方言の音声を具体的に記述したものとしては最も早期のもの

思われるが、とりわけ入声字における南京官話と北京音との比較は、その関係を考える上で重要である。そこでは「学」の発音として、南京官話「hiöh2」、北京音「sio2」「siau2」（また「hio2」「hiau2」とも記される）を挙げている。これらは具体的にはそれぞれ南京官話[hio2]、北京音[çio][çiau]を意図した表記と考えてよいであろう。[çiau]は元代の/hiau/まで遡りうる伝統的な北方音である。これに対して[çio]の方は、南京官話の音形が[hio] > [çio]として北京語に入り込んだものと考えられる。この音形は初め読書音として取り入れられたのであろうが、この時期にはすでに口語としても広まっていた。

Wade(1859)では、「学」の北京音として上記二音のほかに「hsüeh」が加えられている。この音は音節表にはなく、音節表に付録として添えられた多音字表の中にのみ見えるから、よほど例外的な（あるいは新しい）音形と意識されていたことになるが、ここに至って現代音と同じ[çyɛ]が現れたことになる。この音の成立についてはEdkins(1862:56-58頁)における表記が参考になる。そこでは「学」の北京音が以下のように様々な音形で表記されている。

「義学」:「i4 hiöh2」「i4 hieuëh2」

「学文」:「hieuëh2 wen2」

「学生」:「hiöh2 sheng1」「hiau2 sheng1」

「学堂」:「hiöh2 t'ang2」

「放学」:「fang4 hioh2」

「大学生」:「ta4 hioh2 sheng1」

「小学生」:「siau3 hioh2 sheng1」

すでに述べたように、音節末の「-h」には音声的な意味はない。エドキンズは「学」の北京音として実に四種の綴りを与えているのであるが、これらは「hiau2」と他の三種とに分けられそうである。すなわち、「hiöh2」「hiöh2」「hieuëh2」の三種は当時は異音として渾然と用いられていたもので、[çio] > [çyo] (> [çyɛ]) > [çyɛ] という音変化が進行中であったことを物語るであろう。このような未整理とも思われる記述は、むしろエドキンズが自らの耳に頼って記述した状況を彷彿とさせると同時に、「学」が[çyɛ]と発音され始めてから間もない時期の記述であることを如実に示している。

3. 「没」「某」

かつて拙稿(2004)において「没」の(音韻史的な対応として)例外的な発音である「mei」について述べたことがある。そこでは「mei」が「没有moyu」の縮約によって生じたものであるという吉池孝一氏の説(「没meiの発音について」『語学漫歩』18号、1994)を紹介した上で、Edkins(1864)が「mei」を北京音と明記していることなどを指摘した。当時は初版本のEdkins(1857)を目にする機会がなかったため、再版本であるEdkins(1864)を利用したが、初版本にも同様の記述があることを今回あらためて確認した。これが「没」に対して「mei」の音を記述した最も古い資料であると思われる。

今回の調査で、「moyu>mei」という「没」に生じた縮約とやや類似した例が見出されたので、ここに紹介する。Edkins(1857:137頁)に「Indefinite Pronouns (不定代名詞)」という一節があり、最初に「某」が取り上げられている。そこでは、まず「Meu means some person or thing.」(「某」は「ある人」「ある物」を意味する)という説明がある。した

がって「某」に対してエドキンズの与えた音は「meu3」である。これは現代音と同じと考えてよい。ところが、それに続いて挙げられている例は次のようなものである。

「某位医生」:「mei3 wei4 il sheng1」(a certain physician)

「有某椿事情」:「yeu3 mei3 chwang1 shi4 t'sing2」(there is some matter)

ここでは「某」の発音が「mei3」と表記されている。二例とも「mei3」であるから、単なる誤記ではない。いずれも「某」の後に「位」「椿」などの量詞があることから、ここでの「某mei3」は「某一位医生」「有某一椿事情」における「某一」の縮約によって生まれた音ではないかという推測が可能である。エドキンズの表記を用いて記せば「meu i >mei」ということになる。ただし、エドキンズの記した「某mei3」が官話音であるのか北京音であるのかは判然としない。この例を含む章には南京官話音と北京音が共に入り乱れて記されているからである。しかしながら、「強+弱」という二音節から生じるこの種の縮約（上述の「没mei」や指示詞「那nei」など）が北京音に特徴的な現象であるという観点からすれば、「某mei3」も北京音である蓋然性は高い。その場合、Wade(1859)には「某」の北京音として「mou3」「mu3」の二音が挙げられているから、「某mei」は「mu i >mei」という変化であったかも知れない。

4. 南京官話と北京音

南京官話と北京語の違いを音韻体系の面から見た時、エドキンズの記す北京音の特徴は、現代北京音同様、入声を持たないことと、尖団の区別がないことである。換言すれば、南京官話には入声があり、尖団も区別するということなのであるが、これが南京のみならず、山東や四川の官話にも見られる特徴であったことは佐藤（1988, 1989）によって明らかにされている。

なお、南京官話という名称は便宜上のものであって、エドキンズ（およびそれ以前の西欧人たち）が記した官話が全面的に南京音に基づいている訳ではない。西欧人たちは南京において最も標準的な官話が話されると認識していた訳であるが、声母における[n]と[l]の区別や、韻尾における[n]と[ŋ]の区別などは、南京音では区別されず、辞書や北京音によって峻別されるものとエドキンズ自身が述べている。したがって、明末以来西欧人の記してきた官話は、主として南京音を反映するとはいえ、厳密には南京音そのものではなく、西欧人が習うべきものとしての正音の体系なのである。

官話と北京語とは、語彙や語法の面ではほぼ同質と言いうるとしても、音韻面ではかなり異なるものであったと見なければならぬ。その点からすれば、「北京官話」というものは、少なくとも音韻的には存在しないのであって、北京には北京語しかなかったと言わなければならない。語彙の面から見れば、卑俗な表現と典雅な表現の違いは存在したし、それらを便宜上、北京土語（あるいは狭義の「京話」）と「北京官話」として言い分けることは技術的には可能であるが、19世紀の北京には他の官話と共通する音韻体系を持ったものとしての「北京官話」は存在しなかった。

エドキンズは異なる音韻体系を持った南京官話と北京語を、あくまでも大きな官話という枠の中に収めようとして苦勞したように見える。それは彼が宣教師たちの研究の伝統に沿って中国語を捉えてきたことによる必然であったかも知れない。ウェイドのようにあっさり官話を捨てて北京語に乗り換えるには、エドキンズの中国語研究はあまりにも深す

ぎたのである。彼は官話に関する知識が豊富であっただけでなく、中国の音韻資料についても詳しかった。そのため、彼が「Spoken Language」とか「Colloquial Language」という名の下に中国語を記述するに際しても、北京語を官話の体系から切り離すことはしなかった。しかしまた、官話にせよ北京語にせよ、必要以上の体系的な整理をせずに、耳に聞こえた音声を忠実に表記しようとしていることも、エドキンズの特徴である。

尖団の区別は官話において明瞭にあり、エドキンズは尖音「ts/t's/s」、団音「k/k'h」と表記したのであるが、団音においてしばしば「見chien4」「去c'hü4」などの記述が見える。これは当時すでに南京においても牙喉音の舌面音化がかなり進んでいたことの証であるが、エドキンズは敢えてそれらを隠していない。北京音においても、上述の「学」に対する四種の表記や「没mei2」「某mei3」など、実際の音声を可能な限り記述しようという意図は明らかである。

当時通用していた二種の中国語をより大きな枠組みの中で捉えようという精神と、個々の音声の緻密な記述とが不思議な形で織り込まれたもの、それがエドキンズの著作なのである。

Edkins, J. (1857, 1864²), *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, Shanghai: London Mission Press.

Edkins, J. (1862), *Progressive Lessons in the Chinese Spoken Language*, Shanghai: London Mission Press.

Wade, T. F. (1859), *The Hsin Ching Lu (尋津録), or Book of Experiments; being the First of a Series of Contribution to the Study of Chinese*, Hongkong.

Wade, T. F. (1867), 『語言自邇集』初版本。未見。

佐藤昭 (1988, 1989) 「清末民国初期の官話方言の音韻 — 欧文の字典資料を対象として — (1), (2)」『北九州大学外国語学部紀要』第64号, 第67号。

高田時雄 (2001) 「トマス・ウェイドと北京語の勝利」『シンポジウム西洋近代と中国』京都大学学術出版会。

中村雅之 (2004) 「没(meí)の成立について」『KOTONOHA』第15号。